

---

# 優等生は俺じゃない

仲条風雅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

優等生は俺じゃない

### 【Nコード】

N2572Z

### 【作者名】

仲条風雅

### 【あらすじ】

魔法高校執行科に入学し優樹は、妹の加奈によって、執行科1年の優等生にされてしまう。更に、有名人となった優樹は、様々な問題へと、駆り出され、校内の権力者にも、頼りにされて、本当は優等生でも何でもない優樹は、苦労しつつも降りかかって来る、面倒事を何とか片付けていくが……。

## 「1」・初登板で嫌な予感（前書き）

始めまして、中條風雅です。

今回が初投稿なので、表現や文章が、上手く無いと思いますが、呼んでくださるとありがたいです。

誤字やアドバイス、感想などが有りましたら、コメントしてくれると助かります。

## 「1」・初登板で嫌な予感

「…ピピピピピピピピ」　「ばん、と目覚ましを切りベッドから這い出る　そして、まだ半覚醒のまま時計を見る…4時30分？」

早すぎる。

見間違いだと思い、手の甲で眼を擦りもう一度時計を見るが　やはり4時30分のままだ、こんな時間に起きる理由など、どう考えてもない。

そう思いまた布団に顔を埋める　だが一度起きてしまったせいか、寝付けない　結局そのまま20分程たち、二度寝を諦め部屋から出る　階段を降りリビングへ向かう。

カ　チ　ヤ　「？」　リビングの扉を開け

ると中から食欲を刺激する匂いが香ってきた。

（カレーか？）　部屋に入りキッチンを覗く、そこで妙に機嫌よくカレーを作っている、一つ年下　妹は早生まれなので学年は同じ　の妹に声を掛ける。

「早いな加奈、もう起きてるのか」

すると、龍崎加奈、俺の妹は、俺が話し始めてから、終えるまでの間に、俺に振り向いて、絵に描いたような笑顔を向けてきた。

「おはよ、兄さん、今日は兄さんの好きなカレーにしたよ、もうすぐ出来るから待っててね！」

どうやら俺が声を掛けるのを待ち構えていたようだ。

「…ああ　それより　どうしてこんなに早起してるんだ？」

返事に少し間が空いてしまった、自分の妹の笑顔に見惚れてしまいそうになるなど、兄として拙いと思っっているが、加奈は鼻眞目に見ても可愛い　と思う。

目鼻立ちはしっかりしてるし、肌は白過ぎ無いぐらいの肌色で、髪は軽い癖っ毛で、明るくオレンジに近い茶髪を、肩の上まで伸ばしている、背は160?ぐらいと、けして高くないが脚は細くウエス

トも細い、胸もそこそこある、いくら妹とはいえ至近距離で、笑顔を向けられると少し動揺してしまう。

「どうしてって、今日は私と兄さんの入学式だからに決まってるでしょ。」

加奈は笑顔を保ったまま、心底楽しそうにしている。

（なにがそんなに楽しいんだ？入学式がそんなに楽しみなのか？俺には理解出来ないな、面倒と思いはしても、学校が楽しみななんて、精々入学出来て良かったぐらいにしか考えてなかったなあ。）

俺が会話中に考えに耽っていると、加奈は

「はい、ブラックでいいよね？」

といって温かいコーヒーをくれた。

それに俺は、「ありがとうな」と加奈の頭をポンと軽く叩いて部屋に戻り、テレビを点け、今の時刻を確認する、4時56分。いつもより時間が進むのが遅く感じる。

加奈が朝ご飯を持って来るまでは特にする事がないので、リモコンを操作していつものニュース番組。普段ニュースなど見ないため、妹がいつも見ているチャンネルを合わせる。

「先ほど4時40分頃に発生した、電車を占拠した事件の犯人は、人質の一人で、登校途中だった、第二魔法高校2年。執行科所属の学生の協力もあり、無事に解決されたと発表されました。情報によると、彼は取材陣の質問に対して「第二魔法高校からは、家が遠く登校に時間が掛かるため、いつも余裕を持って家を出ていたおかげで、事件解決に協力でき、いつもは不便に思っていました。今回は良かったと思います。」と返答しているとのこと。です。」

（高校に執行科なんてものが出来たのは何時からだっただかな）  
などと、また考えに耽ってしまう。

「執行科」 技術の進化によって近年登場し、

銃などの武器に変わって戦争や治安維持な

ど、様々な場面で使われる様になった特殊な技術があり、新しい技術が登場すれば、その技術を専門とした新しい機関も生まれる訳で、近年新しく生まれ、各国で重要になって来ているのが、

#### 「魔装検事」

別称、執行人だ、魔装検事は、名の通り魔法の装備を駆使して事件を解決に導く職業で、その執行人に成るための学科が執行科だ。

魔法自体は半世紀前頃から実用化され、先ず医療に始まり企業製品、家庭用品、交通手段といった具合に普及してきた。

その次に普及が始まったのが「魔装」だ。そんな最新の装備の使用を許可されている、唯一の機関である魔装検事に、成る為の教育を受けられる執行科は、当然人気が出る訳で、魔法の実用化と共に、増設されてきた魔法学校の中でも、一番の倍率を記録している。

（魔法なんて、まだ謎も多い、危険な技術を使わなきゃならない職業に、誰も彼もが成りたがるのか：執行科が無駄に人気高いおかげで大して成績良くないこっちは入試で大変な思いをする羽目になったからな まあ今日から無事に魔法高校執行科に入学出来て良かったな。）

そこまで考えた所で妹がこちらを睨みつけているのに気づいた。

「どうした？加奈」と妹に声かける、

すると加奈は、返答せずにキッチンへ戻って完成したカレーライスを持って来て、俺の前に少し乱暴に置き、自分の席へ戻ると、既に食べ終えていたらしいカレーライスを、片付けに再びキッチンへ向

かった。

どうやら、考えに没頭していて、加奈に声をかけられても気付かなかったみたいだ。

妹はかなり怒っているらしく、（これから一緒に、入学式に行くのに、妹の機嫌が悪いのは拙いな）と思った俺は、テレビに写し出されている時計をみて、家を出るまでに余裕が有ることを確認してから、妹の攻略？へと向かう事にした。

その後、30分程たつぷり？時間をかけて妹を説得した優樹は、三校 第三魔法高校の略称 の制服を着て、妹と一緒に、三校の最寄り駅で電車を降りて、三校に向かって歩きながら、（この道を歩くのも入試結果を見に行つて以来か、久しぶりで緊張するなあ。）  
などと考えていた。

「国立 第三魔法高校」…魔法関連の分野において、比較的進んでいる日本で、三番目に開校された第三魔法高校は、日本国内に12ある魔法高校の中でも、執行科の導入が最も遅かった、そのため他の魔法高校に比べ倍率が低く、比較的簡単に執行科に入学できる（それでも入試倍率は3倍を越えている）と言われている。

周りを見れば、優樹達のように、緊張した顔つきで、三校までの道を、歩いている者も少なくない。

そんな中、優樹達の丁度前を歩いていた、男子生徒が優樹に向かって「あんたも新生だろ？」と声を掛けてきた。

優樹は、妹に興味があるのは見え見えだと思つたが、入学前に同学

年の友人が出来るのは、正直ありがたいと思い、「ああ 俺は龍崎優樹、こいつは妹の加奈だ、宜しくな。」と少し愛想良く応え、加奈も「宜しくお願いします。」と応えた。

「俺は一条拓人、優樹、加奈、宜しく。」

それぞれ紹介し終えて、一緒に三校を目指しながら、優樹は、「こいつ意外といい奴だな。」などと思う反面、一条と同じクラスになったら大変だろうなと考えていたが。

この時優樹は、何か予感の様なものを感じていた、それも余り歓迎の出来ない予感を…。

## 「1」・初登板で嫌な予感（後書き）

優等生は俺じゃない、第一話最後まで読んで下さり、ありがとうございます。

第二話も、近く投稿する予定なので、楽しみにして頂けると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2572z/>

---

優等生は俺じゃない

2011年12月9日02時11分発行